

## 編集後記

単にこの辺で「ローテーション」をこなしておくつもりでニューズ・レター第7号の編集をお引き受けしたところ、本号は今春のシンポジウムの成果の特集を盛り込んだものとなり、これまでにないボリュームの1冊となった。寄せられた原稿の数は全体で30を越えている。ご執筆いただいたのは、いずれも多忙を極める状況にある方々ばかりであるから、これだけそろそろまでに多少の難航が待ち受けていたのは、ほとんど当然のこととしなくてはなるまい。当初の発行予定からはかなり遅れる結果ともなった。早めに原稿をお送りいただいた方々にはとりわけお詫び申し上げます。しかし、十二分にそれに見合うだけの、充実した内容の号になったと自負している（むろん編集者はただ原稿の到着を待機していただけのことで、自慢の余地は全く何もないのであるが）。

欧米の西洋古典学の領域でも、最近また古代ギリシアと古代アジア（特に中国）との比較文化論的研究がいくつか見られる。G.E.R.Lloydの2著作あたりが広く知られている。今年出たものに、S.Shankman（西洋古典学者）とS.Durrant（中国学者）の共同作業による *The Siren and the Sage* がある。何らのケレン味もなく、いくつかの主要古典著作同士と比較を試みたもので、「正攻法」にかえて新しさを感じられる。議論には多々不満を覚えながらも、何やらわれわれの「仲間」を見いだしたような気にもなって、忽々に通読してしまった。導入部の一節に、前5世紀のアテナイの墓地から中国産の絹織物が出土した、という近年の考古学的発見への言及があって、本旨からは些末なエピソードながら、興味を動かされた。むろん「シルク・ロード」以前の話ということになる。しかもその遺物は、どうやら古代アテナイきっての名門にして悪役たるアルキピアデス一族に関わるものだとのことである。

「古典学再構築」のプロジェクトが本格的に発足して1年以上が経過した。さて、われわれの新たな「シルク・ロード」はどのような完成を見るだろうか。

平成12年6月

内山 勝利